#SUMMER 2022 NO VIOLENCE BEGINS WITH YOU #1

あなたのナイフを捨てること

特殊美術批評 西原珉

SUMMER 2022 Artists 参加アーティスト

ヘルト・ロビンス／曽根裕／パヴェル・ビュフラー／エドワルド・サラビア／迎英里子
Gert Robijins/Yutaka Sone/Pavel Büchler/Eduardo Sarabia/Eriko Mukai

ワンタニー・シリパッタナーナンタクーン／会田誠／ロビン・ヘレラ／カッキー
Wantanee Siripattananuntakul/Makoto Aida/Robin Herrera/KAKKIE

シャーロット・デ・コック／ノア・ラティフ・ランプ／荒木悠／大和田俊／村上美樹
Charlotte de Cock/Noah Latif Lamp/Yu Araki/Shun Owada/Miki Murakami

パイサルン“オスカー”アンピン／三村昌道／86B210／雨宮庸介／藤浩志
Paisarn‘Oscar’Am-Pim/Masamichi Mimura/86B210/Yosuke Amemiya/Hiroshi Fuji

岸健太／岩井成昭／リクリット・ティラヴァーニャ／大東忍
Kenta Kishi/Naruaki Iwai/Rirkrit Tiravanija/Shinobu Daito and more!

カーナビは使わず辿り着く

その施設はサン・ゲイブリエル山脈の裾野に広がる住宅街の奥にある。初めてそこを訪れる日は、CDC*1の地下駐車場を同時に出発して、上司のエイプリルの古ぼけた水色の車についていった。住所は教えてもらえない。

買ったばかりの私のトヨタには最新のカーナビが着いているけれど、カーナビに建物がある地点を一時登録することも許されない。エイプリルはゆっくり車を走らせ、1ブロックごとに私が目の届く範囲についてきているかどうか確かめるために手を振った。そのたび、私も軽く手を振って答える。エイプリルもそうやって、上司だったカズヨさんから、そこに行く道のりを教えてもらったのだ。

貨物線を越え、メキシコ人街(言うまでもないが、この辺りはそんなこと言われるまでもなくはじめから彼らの街だ)を掠め、4つに分岐している道の一つを選び、ヘアピンのようなカーブを曲がる――建物への道のりは思ったよりも複雑だった。いちどエイプリルの車を見失い、そうなった場合に備えて何も打ち合わせしていないことに気がつくが、彼女は見失うなんてことを想定すらしていないに違いない。ほらね、道を曲がった少し先に、ハザードを出して待ってくれている水色の車がある。

ドーナツ屋やナイトラウンジやタコススタンドがある最後の大通りからまっすぐに山に向かって伸びる道は、やがて大きな鉄製の門がある広大な土地のエントランスに突き当たる。そこを右折。道が山の麓をめぐる緩やかな曲線となり、急な勾配にさしかかる少し手前、母屋とゲストハウスがある一見普通の家が、私たちが働くDVシェルターだ。

私はいつも裏手のコンクリートの駐車場ではなく少し坂になっている建物の正門前の道に車を停めた。そこで車を降りると、大きく枝を伸ばした樫の木の林を渡る風の音と、鳥の鳴き声が聞こえる。蜂の羽音も。建物の敷地からは、滑り台のあるラバーグラウンドで遊ぶ子供たちの声がする。夏が近づいている。もう6時になるけれど、まだ全然明るい。エレメンタリーの子供たちはもう宿題が終わって、シェルターの一室で遊んでいる頃だろう。

シェルターと家族

実際のところ、私たちはその場所をシェルターと呼ぶ代わりに思い思いの愛称やイニシャルで呼んでいた。名前を呼んではいけない人みたいに。シェルターのメインの建物は、1階がオフィスとランドリーになっていて2階に3つの居住ユニットがある。一番大きいユニットは、先日、規則違反が重なって退去処分となり空室のままだ。そこに住んでいた母親は、当てつけに料理途中の鍋を残していったので、ロサンゼルスの暑さに晒されたキッチンつきのその部屋は発見されたときにはひどい有様であった。「鍋はどろどろで何の料理かも分からない状態だったから、泣きながら捨てたわ。やばかった。ここには永久にバイオハザードの黄色いテープを張りたい」と住み込みの管理人が言う。彼女は夫とともに、1階のユニットの1つに住んでいて、毎日門限チェックをしつつ、厳格な寮母のようにシェルターの住人を見守ってくれている。

敷地内にはあと3つの建物があって、1つは独立した一軒家。その家はたいてい子供が多めの家族にあてがわれた。もう一つの家はクラブハウスのようなつくりになっている。ウッドデッキがついた大きな部屋は共用で、調律の怪しいピアノ、棚に並べられたおもちゃ、古ぼけた絵本や篤志家に寄付してもらった画材で子供たちが遊ぶ。キッチンや暖炉もあった。ハロウィン、サンクスギビング、クリスマスが立て続けにやって来る年末の3ヶ月には、その都度、ボランティアを募って精一杯に飾り付けをし、七面鳥やチキンやローストビーフを支度して、そのなかでシェルターに暮らす家族全員とソーシャルワーカーとボランティアで集まって食べた。

シェルターに住んでいるのは、配偶者やパートナーからの暴力から逃れてやってきた女性、そしてその子供たち。中国、韓国、日本、フィリピン、タイ、ベトナム、中南米、キューバ、それぞれに出身地もこれまでの経験も子供の数も違う。言語も、ふだんの食べものも、抱えている問題も。母親のほうはほぼ例外なく合衆国生まれではなく、適切な書類を持っていないために強制送還のリスクがある者もいる。母親は英語が不得手で会話に自信が持てないでいることも多いが、その子供たちは学校に通い始めるとたちまちアメリカンアクセントの英語を話すようになる。そして、私と母親の外国アクセントの英会話をからかう。私たちのアクセントを笑いながら繰り返したり、外国人(つまり、我々)には発音しにくい単語を言わせたり。からかわれること自体はうれしくはないが、それは彼らがアメリカに根を下ろし始めたサインなので、そんなに悪い気はしない。

非暴力は私から始まる

3年ほど前、DVシェルターというところに初めて行ったときは、前任者のマルコから住所の代わりに場所のヒントが書いてある黄色の紙切れを渡された。「シェルターの在処はこの世で一番秘密にしなければならないことの1つ」と彼は断言した。同じ紙片を渡されたもうひとりのインターンのジェシカが、不適切な言葉を呟きながら舌打ちするのが聞こえた。

紙切れにはこう書いてあった。「フリーウェイが交わるところ、○○公園、ヨガの施設が私立の高校と出会う地点から300フィート」

マルコのクイズを解いてシェルターに到着したのは私のほうがわずかに先だった。外扉の頑丈な鍵と格闘していると、ジェシカが天を仰いで疲れ果てた態で登場した。ジェシカは私の上着のポケットにあった紙片を見つけると自分のものと重ねて細かく手でちぎり、少し離れたゴミ箱に放りこんだ。そしてポーズをとって言った。「記念すべき仕事のスタート!」。

そう、この日は私たちがDVシェルターで直接暴力に立ち向かう最初の日。

この日のジェシカは青いTシャツを着ていて、その前面にはこうプリントされている――NO VIOLENCE BEGINS WITH ME(非暴力は私から始まる)。内扉の向こうでは、私たちの到着に気づいた子どもたちがシャボン玉や三輪車や、思い思いのおもちゃを見せようと集まってきて、こちらを見つめている。あの子たちになんて言って話しかけよう?

親切と麻婆豆腐

今のシェルターでは、毎週月曜日と水曜日、エイプリルとAMFT*2の私と、他のサービスセンターから来ているASW*3のアンジェラ、大学院で勉強中のボランティアのKがやってきて、母親グループへのセラピーや、子供たちとのアクティビティ、ケースマネージメントを行った。全身にタトゥーのあるCDCの同僚で、AMFTのMさんも来てくれる。Yさんの華やかな鯉のタトゥーは子供たちに人気がある。

カウンセリングやアクティビティの他にも、子供たちの通う小学校の手配、小中学校の先生との面談、DV法に基づく接見禁止命令の取得や、滞在資格の申請、それに伴う弁護士との連携、補助金の申請、資格取得に向けた就労支援プログラムの申請、トラウマの治療、精神科医との連絡、個々のケースについての話し合い、私たちがやることは無数にあった。10年以上このシェルターに関わっているエイプリルの指示のもと、手分けしてそれらに取り組み、20時になったらクライエントとその日のまとめをし、集会室を片付けて各々の車で帰る。帰宅時はたいてい疲れているのでミーティングはしないのだが、受け持ちの家族に問題が起きたときは、途中のパンダ・エキスプレス*4で落ち合って、話し合うこともあった。

エイプリルは香港からカナダ経由でアメリカに来たベテラン。アンジェラは大学院を終えたばかりの上海からの留学生。私は東京出身でアメリカに来て臨床心理を志したエイプリルよりも年上の新人。という3人なので、パンダ・エキスプレスのアメリカナイズされた中華料理は、誰からもちょうど等距離にあるクオリアとしての中華料理の役をうまく果たしている。エイリルはスープ、アンジェラは炒麺、私は麻婆豆腐をいつも買う。

ロサンゼルスに引っ越してきてすぐ、子供が同じ小学校に通う香港人ママが近づいてきた。軽く自己紹介を終えると、彼女は言った。

「日本から来たのね。ハズバンドの仕事は?」

「アーティストです。彫刻とかを」

そう答えると、彼女は自分の乗ってきたワンボックスカーに私と子供たちを押し込んで、中国系移民が多く住むサン・ゲイブリエルへと車を走らせ、あるレストランの前で停めた。

「これからここでご飯を買いなさい。ご飯にスープにおかずが三品ついて3ドル99よ。安いわ」そして麻婆豆腐と青菜と青椒肉絲が入った弁当を3つ、今日のディナーに、と私に買ってくれた。帰り道には、街角で苺を売っていたメキシカンの少年を呼び止めて信号待ちの間中、ぎりぎりまで交渉を行い、5パック買って1パックを私に寄越した。車の中はお持ち帰りの中華料理と苺の匂いでいっぱいになった。

「がんばって。何かあったら声かけて」

別れ際、彼女がそう言ったときに初めて「日本からやってきたばかりのアーティスト」家で生活が大変だろう」と心配してくれたんだな、と気がついた。夫婦に子供が2人いる家庭の「貧困ライン」が4万ドル台半ばだということをそのときはまだ知らなかったが、その基準に従えば渡米当時の我が家は確実に貧困層であったのだ。

だが、いずれにせよ。ロサンゼルスのような都市では移民、貧困、ホームレス、銃と暴力、それらが自分の数ミリ隣にある問題だと気づくのに時間はかからない。

また、ときどき、いや頻繁に。移民と移民のあいだには、余計な混ざり物のない親切の交換が見えるときがある。それは、シェルターの住人のあいだにも。そして、私がいつも麻婆豆腐を食べるのは親切の匂いがするからだ。

マリアとインカの話

マリアは7〜8年前に、当時3歳の娘を連れてペルーから密入国してきた。アメリカで結婚し、その男性との間に生まれた男の子とともに2年前からシェルターに暮らしている。娘はスペイン語と同じように英語を話すが、マリアと男の子はほぼスペイン語で会話する。

今日はマリアが英語を学ぶために通っているアダルトスクールで母国ペルーについての発表をする前に、その練習台を務める日。マリアはきれいに作られた資料を見せつつ、はにかみながら故郷の歴史を遙か昔に遡って説明する。

「インカ帝国には文字はありませんでしたが、結縄の文化がありました。それはキープと呼ばれています。結び方や結び目の間隔、ねじり方を変えて、実に様々な数字を表すことができたのです。キープは主に役人たちが記録に使っていました……」

資料にあるキープのイラストも、パラカスの織物の絵もマリアが描いたもの。彼女は器用でユーモアがあって聡明で、教育を受ければ能力を発揮するだろう。でも夫に殺されかけた過去と彼女を切り離すことはまだできない。マリアはペルー時代のこと、夫のことはほとんど話さないが、身動きできないくらいの深い痛みが彼女を取り巻いていることにはきっと多くの人が気がつく。心理的外傷とは良く名付けたもので、身体的な傷が癒えたあとでも見えない傷がその人の一部になってしまっていることの難しさに、どうしようもなくやりきれない気持ちになる。

シェルターからの帰り道、夏の夜はまだ少し明るくて、気持ちが少し沈んでいるからか、信号や他の車のテールライトがつるつるした透明な光となって目に映る。いつものランプからフリーウェイに乗る。お化けのように大きい椰子の木の影の向こうに、トンネルが現れ、そのちょうど頭上にあたる位置にいつのまにか誰かが設置した「PERSIST」のサインが見える。そのトンネルにさしかかるたびに、七文字のサインに励まされる。やれることは少ない。でも、きっとまだできることがある。

*1 Community Development Centerの略
*2 大学院を終えた免許取得前の心理セラピスト
*3 大学院を終えた免許取得前のソーシャルワーカー
*4 有名なカリフォルニア州の中華料理のファーストフードチェーン

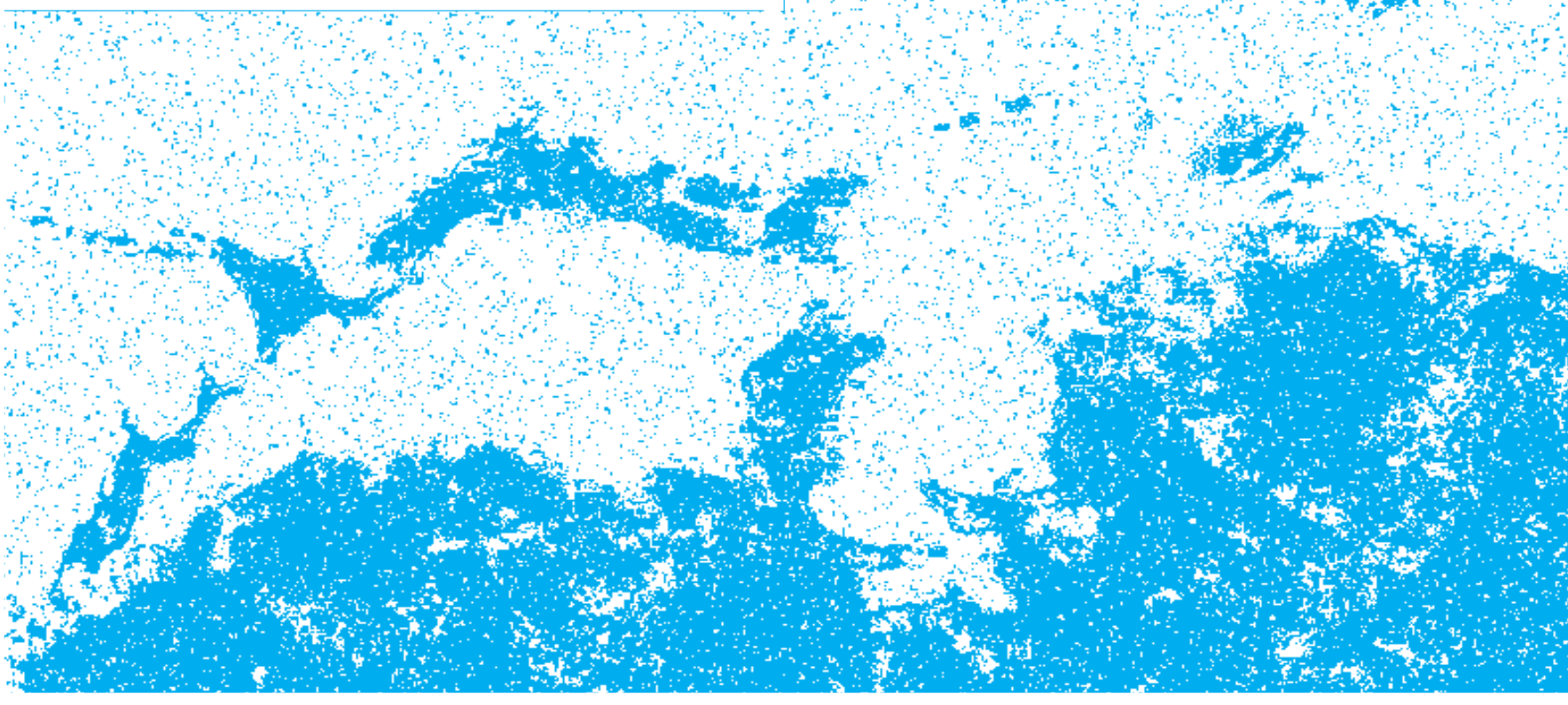
この文章は、岩瀬海、中島伽耶子、櫻井莉菜の三人の展覧会「例えば(天気の話をするように痛みについて話せれば)」(2022年4月29日〜7月3日 秋田公立美術大学ギャラリーBIYONG POINT)の展評として書かれ、SUMMER2022のために加筆・改稿したものです。なお、登場人物・できごとは実在の人物・現実のできごとは異なっています。

この新聞は、反戦の意志を共有するアーティストたちによる不定期連続展「SUMMER2022」と並走するかたちで刊行される、ひとつの独立したプラットフォームです。次号に向けて、皆さんの投稿もお待ちしています。

募　集｜写真、イラスト、詩、短歌、俳句、川柳など。(必ずしも反戦の意志を明示するものでなくてもよいです。)
投稿先：summer2022nonviolence@gmail.com 編集部まで。

This newspaper is an independent platform that will be published in parallel with “SUMMER2022,” an irregular series of exhibitions by artists who share the same anti-war will. We welcome your contributions for the next issue.

Call for Readers’ Views｜Photographs, illustrations, poems, tanka, haiku, Senryu, etc.
(submissions do not necessarily have to explicitly express anti-war intentions).
Submissions should be sent to: summer2022nonviolence@gmail.com Contact the editorial department.



未来のためのノスタルジー #1

能勢伊勢雄×西原珉×長谷川新

SUMMER2022の前に

長谷川: アーティストの曽根裕が、ロシアによるウクライナ侵攻やコロナ禍において、アーティスト同士や、市民の人たちそれぞれが繋がる場をアートとして作った方がいいんじゃないか、と思いたち、SUMMER2022のプロジェクトが始まりました。反戦、反暴力を、人々や作品が集まることから示していこうというものです。

秋田は日本海に面していて、ロシアともとても近い。明治以前は、北海道のアイヌの方や中国大陸の方と交易で自由にやりとりをしていたわけで、地図の見る向きを変えるだけでも、地政学的に重要な場所であることがわかります。ペパーランド「197年から続く岡山のライブハウス」がずっとやってきたみたいに、各地で勝手に濃い連携がなされてるみたいなのがすごい良いなと感じているんです。珉さんはどういう手応えとか気持ちで、今回やろうかなと思っておられますか?

西原: 私はずっとセラピーカウンセリングの仕事で、人と対することが多いんですけれども、今年は明らかにみんなの気持ちがすごく不安定になっています。自分の周囲の不安が強まったひとつには、トランプ大統領以来のアメリカ国内でのものすごい分断がある。もちろん常にそういうのはあったけれども、どうしようもなくなってきてる手応えがあって。しかも国会襲撃がありましたよね。ドメスティックバイオレンスのシェルターをやっているとちっちゃな暴力の延長上の暴力だと感じるんですよ。ウクライナのことも、私にとっては全て繋がってる。暴力の連鎖。みんなの心理状態が引き寄せられていく、あるいは影響を受けやすくなっている印象があって。自分にできることから何かしようというのと、そういうふうに感じている人たちと繋がりたい。今はいろんな意味での連帯がすごく重要だと思っているので、そういう意味での場所を作りたいと思ったことが一番大きいですかね。

起源に触れること

能勢: 怖いのは、歴史の問題です。プーチンはユーラシア主義と言ってるわけですよね。ユーラシア民族の復興をやるんだと。それは、ナチのゲルマン民族とあんまり変わらないです。歴史の見方がおかしい。100%純血のゲルマン人が存在するのかと言ったら、わからないと思いますよ。だから歴史の見方が、すごく狂ってるっていう。ヨーロッパは国境がずっと動いてる地域だから、フランスとドイツ国境も、微妙に動くじゃないですか。確かにウクライナも、ロシアの一部であった時期もある。そこへものすごい古い歴史主義みたいなものを結びつけていくと、何だってやれてしまうっていうか。

岡山の教え子たちが「Phenomena」という写真のグループを作っていて、『フトマニクシロ・ランドスケープ 建國の原像を問う』という写真集を刊行しました。それは大和朝廷が出来上がっていく原型的なものを写真で押さえていったんです。原風景みたいなものは撮れたから、今度はさらに遡ろうとしてて。日本の新しい年代記が出来上がるっていう計画で、年表まで作り上げている。ただ、そういう作業をやりながら、古い日本の原型の歴史を触ることが、プーチンのユーラシア主義みたいな狂気の源泉を見てるような気がするんですよ。ひとつ間違えればものすごい怖いことなんだっていう。

どのように表現を手渡すか

長谷川: SNSではなくガリ版や新聞を使ってみようとしてるんですが、そうすると、刷って「配る」とこまでやんなきゃいけないわけですよね。今だと電話やSNSで呼びかけるとかになるわけですけど。どういう、あるいはどれぐらい時間がかかってたものなんですか?例えば50年前、羽田空港に闘争のために集まるときに、具体的にどう動かれてたんですか?

能勢: どこへ何時何分に集会をやるから同じ声をあげる運中は集まってくれって。ガリ版を用意して鉄筆でガリガリガリガリ…って。それから、街頭でビラをまく。大学だったら学生会館とか。

長谷川: そこがとても大きい経験な気がするんですよね。アートに限らず、作るという営み自体はいつの時代もある。それを人に伝えるっていうところの違いが気になっています。街中で知らない人に配って無視され続けるとか、そういう瞬間が大事な時間であるような。SNSで投稿しても、あまり恥ずかしい思いをしないじゃないですか。街頭でビラをまくって時間もずっくかかるし。

能勢: そんなこと思ってたらなんもやれんよ。

長谷川: まあそうですよね。

西原: ビラを撒いてた世代として言わせてもらうと、恥ずかしさはなかったかな。むしろ誇りを持って配ってるみたいな。そこがコミュニケーションになっているところが大きくて。来ないなら何か起こさせてやるくらいのつもりで私の周りは配っていたと思うんですよね。

能勢: 本当そうだと思いますよ。サルトルがノーベル文学賞を辞退してまで街頭に出て、アジビラを配り始めるじゃないですか。そうしなきゃいけなくなった、そんな気持ちですよね。ヨーゼフ・ボイスが晩年はシュタイナーの黒板絵みたいなものを、書きながら、説明してる写真が残っていて。作家が市民の前で考え方や思ってることを伝えていくみたいなのを最終的なアートとしてやるわけですよ。ボイス自身が社会彫刻と呼んだんだけど、実際にアートというのは社会を彫刻していくようなもんなんだっていう。ペパーランドは、音楽を通じて社会を彫刻していると思ってますからね。

配信と対面

西原: 今回はまさに直接の体当たりのコミュニケーションになる気がしています。ボイスの黒板にしても、自分の概念をその場で生成しながら書いてく身体性みたいなのもありますよね。その辺、今回どういうふうにやっていけるかなって、ちょっと思ってるんだけど。長谷川くんはどういうふうに考えてます?

長谷川: なんか展覧会やってると、広報面がどれだけデジタル化しようと、アーカイブがどれだけオンライン化しようと、やっぱりまず作品があるし、物理的な対象がある。マテリアルのもつ力が失われない限り大丈夫だとは思っています。頭で考えるだけではたどり着かないところに連れて行かれるのが物質の持つ力というか。今この話し合いもそうですけど、展覧会の前のいろんなやりとりみたいなものを展示で見せていった方がいいのかは、考えるところです。珉さん、何かアイディアありますか?

西原: いや、ないですね…。でもガリ版はアジビラじゃないけど、いろんなテキストが集まりましたというだけではなくて、訴えてるものにしたいなとは思ってる。だから街角に立つかどうかは別として、もっと能動的に配っていきたいなと。こっちからどんどんいらない人にも届けて。

長谷川: 何年か前に友人たちとやった批評誌『アーギュメンツ』っていうのがあるんですが、手売り限定でネットはもちろん、本屋でも買えない。すると会いに来てもらうしかないので、読者に会えるっていう。告知は僕も新宿とかにいるようってTwitterに書く。オンラインとオフラインの両方あるんですよね。手渡して相手の顔が見える、会話が発生するみたいなのはいいなって思うし。ただコロナで、その物理的なやりとりみたいなのがかなりできなくなって。今、第3波が終わろうかなとしてるぐらいだと思うんですけど、トークイベントもやり方が変わったなという気がするんですよね。どう戻せばいいのか。後日配信ありってすると全然人来ないっていう状況で。でも売り上げは上がってるんですよね。後日配信をお金払ってでも見る人はいっぱいいて成り立つんだけど、現場で聞いてくれる人は全然いないみたいになってて。これは何か違うんじゃないかみたいな違和感があるんですよね。

能勢: 僕はライブハウスを経営しているんだけど、コロナになった途端いち早く岡山県でも、配信を取り込んだ店ではあるんですよ。でも、2回目の配信やった時に、間違いだな思った。ライブはホールでやる発表会じゃない。お客さんの歓声と緒にやってるバンドもフィードバックを受けて、熱を帯びてくるんですよ。つまり客席に集まってる人とプレイヤーが一緒に作るのがライブなんです。配信で演奏を見せるだけなら、娘がピアノ練習したから発表会に行って、みんな何も言わずに座ってじっと見て、ああいう感じ。だから、後日配信って極端に言うたら、8割大事なものが抜けてて、2割の報告を見てるようなぐらいのもんですね。ライブ配信取り組んでみて、別ものだなというのはすく感じました。

長谷川: 珉さん、授業とかも結構そんな感じしますよね。秋田美大はどうですか。

西原: オンラインでやるときは100何人とかが一斉に見るから、みんなあの顔とか出してないんですよね。授業で見渡しながらやってたら、もうちょっと話した方がいいのかなとか、ひょっとしてこの子たちに響いてるみたいなことがわかるんだけれど。そういうことが全くわからないままやるので、孤独感半端ないっていうか。地図がない感じですよね。言葉とか言ってること以外でいかにコミュニケーションしてるのかってことは毎回感じるし。そのやりとりがライブトークとか音楽の醍醐味だと思うんで。一説には完全には戻らないって言われてるじゃないですか。

長谷川: 何かそうですね。トークイベントとかそうで。行くっていうのより家で。それこそトークイベントって、ちゃんとした姿勢で相手を見て聞かなきゃいけないじゃないすか。

西原: そうそう、結構なコミットメントなんですよね。

長谷川: ラジオ感覚とか、極端な話、1.3倍速とかで聞いたりとかしてるから、それを戻すのに説得力が必要というか。現場で直接相対して話を聞きたい、質問をしたいって、思わせるぐらいのことをやっていかないといけないんだろうなっていうのは感じますね。

平和と呼ぶには遠く 歴史にするには早く

インディペンデントキュレーター 居原田遥

この歳になっても躊躇いなく大好きだと言える沖縄のロックバンド、MONGOL800による楽曲の歌詞の一節である。過去の戦争を歴史にするにはまだ早い。「戦争」という言葉が指す、日本社会が記憶している出来事は第二次世界大戦だが、あの戦争が作り出した悲劇を過去の記憶として位置づけ、そして歴史化するには、まだまだ解決していない現実がある。税金を払うことすら難しいのに、その税金が一端となり、使うかも分からず、さらには完成するかも分からない新しい軍事基地が建設されている。弔いたくもない奴の葬儀が、国税を使って開催される。「戦争反対」はもちろん重要なテーマだが、この「平和」と呼ぶには遠いはずなのに、「平和ボケ」しているクソみたいな社会に突きつけるべき主張は、腐るほどある。

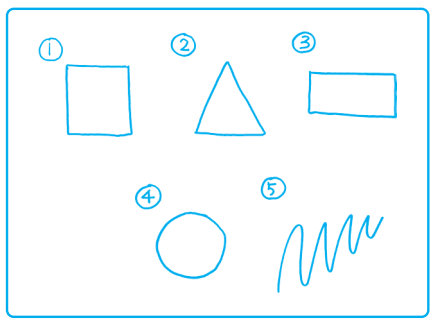
私にとっては、より身近に感じる「戦争」が、起きてしまった。2021年にミャンマーで起きた国軍によるクーデター以降、止まない不当な暴力に対し、いまなお多くの市民が抵抗を示しながら闘いを続けている。ミャンマー国軍による弾圧は厳しく、政治的発言や明らかな抵抗の意思主張は攻撃対象となり、拘束や逮捕は当然のように行われ、根も葉もない罪を言い渡され実刑を伴う刑事罰を受けることもあれば、時には拷問や死に至る暴力を受ける事態も少なくない。抗議活動を行い、政治運動に関わるということは、直接的に、その身を危険にさらすということ。活動家をはじめ、学者や芸術家など、いわば「見せしめ」となり得る著名人は、故郷を捨てて亡命している人も少なくはない。それでも「抵抗」を示し、抗議の声を上げる表現者たちが身を守る手段として、匿名や偽名を用い「名前を隠す」という方法をとる。ペンネームやネット上のアカウントによる投稿、画像やハッシュタグだけの拡散。抵抗を示し平和を願うリスクは大きいにもかかわらず、その声は溢れ続け、その総数を把握することが難しいほどである。 さらにそれらの声は、直接的な表現や具体的な文字・言葉としてではなく、「芸術」が活用されることも多い。フィクションの物語として作られたアニメーション、ドローイングを駆使した抽象的な映像表現、アイコニックで理解しやすいイラスト。芸術的表現は、抵抗の意思を示すために、身を守ることが出来る有効的な戦略なのだ。そしてそこで生まれる表現にたとえそれが文化や歴史を知らない違い国の政治を相手にしている者の意思だったとしても、どこか共感し、応援し、勇気づけられることだってある。その声を発するものが誰か分からなくても、あるいはその社会に対してなんら関係性がなく思い入れがなかったとしても、その地の言語すら理解出来なかったとしても、私の目に、耳には、彼／彼女の意志は届いている。 さて、この日本社会で、反戦や平和を願う言葉や意思を表現するのに、躊躇う理由はあるのだろうか。それらを阻害するもの、危険に晒すものはあるのだろうか。そんなものは微塵もない。声を上げること、主張をすることになんらかの戸惑いや必然性を求める必要はない。身の危険を感じることなく、自由な表現を行うことが出来る。こんな状況すらも、失ってしまうのかもしれないのだから。 反戦を、抗議を、腐った社会に対する抵抗を。躊躇うことなく、かたちに、声に、表現として突きつけ、残していこう。いつかこのクソみたいな社会を堂々と愛せる日が来るまで(そんな日は、自分が生きているうちはないかもしれないが)。その手段として「芸術」が活きる世界を、私は守りたい。

ピース

黄身子

2022年後半期 ソフィア・ヴェストの心理幾何学占い

いちばん自分にしっくりくる形を選んでください



黄色は心理的に鋭い色であり外に向かう運動を含んでいる。そのため尖った形である三角形と関連している。青は深く平面上から後退する色であり、落ち着いた形態である丸にふさわしい。赤は最も重要な色のひとつであり、断定的で力強い性質を持つ。そのため、平面上の四角と連動している、…
――カンディンスキー『色彩論』(バウハウス時代の研究より)

正方形を選んだあなた――がまん強く、細かいところにも神経が行き届くあなたですが、そんな自分にちょっと疲れてきます。2022年後半期は知識を得る、情報を分析することから離れて全体を眺めるようにつとめてみてください。2022年、これまで頑張ってきたあなたなので、今はちょっと気を緩めても大丈夫。解決できないことは「晩寝かせてみましょう。【ラッキーカラー】ユニコーンカラーでつねに気持ちをキラキラさせてみて。【相性】仕事では丸タイプの人と好相性。波形タイプの人と衝突するサインが出ているので、注意。

三角形を選んだあなた――家族、同級生、同僚など仲間を気づかい、ひっぱることが出来るあなた。2022年後半はあなたの決断が求められる局面がありそうです。人と自分を比較するのではなく、その場面で必要なことは何か、に重点を置いて判断すると良い結果につながります。周囲の人のために行動すると、自分のやりたいことの実現への近道になりそう。【ラッキーカラー】後半戦、勝負色は原色ではなく、ピンクやベージュなどの中間色で!【相性】恋愛は少し低調ですが、時期的なものなので焦らなくて大丈夫。

長方形を選んだあなた――自分は今のままでいいのか、という迷いが夏の間に出てきたのではないでしょうか。でも今はまだ決断の時期ではありません。後半期には自分の長所や得意なことをあらためて見つめてみましょう。来年には重要な選択をする可能性が高いあなた。そのときに備えて今年のうちに考えを整理しておくと、大きく成長できます。【ラッキーカラー】洋服や文房具は黄色やオレンジ色など集中力を増す色で。【相性】長方形どうしは停滞するサイン。アドバイスは三角形タイプの人に聞きましょう。

丸を選んだあなた――今年前半期のあなたは仕事もプライベートでも忙しかったのではないでしょうか。リモートの人はちょっとストレスがたまってしまったかも。後半期はそんな自分を存分に労ってあげてください。自然の中に出かけるのが良さそうです。休日や年末は久しぶりの食事や飲み会のお誘いが多いかもしれませんが、自分の時間をつくることも大切ですよ。【ラッキーカラー】自然を思わせる深緑や水色を取り入れてみましょう。【相性】波線タイプの人がパートナーのあなたはすれ違いが増えてくるサインが出ています。コミュニケーションを増やして。

波線を選んだあなた――今年前半は結構波乱だったのではないですか? ジェットコースターみたいで嫌だな、と感じた波形さんもいたかもしれません。でも大丈夫!波線タイプの人の後半期は充実しています。今までの努力が実ってアイデアが実現できるとき。転職などを考えている人は思いがけない縁がつながるサインも。あなたらしさを大事に、落ち着いていきましょう。【ラッキーカラー】落ち着きを得られるアースカラーがおすすめです。【相性】パートナーと問題が起きたら相手の話をよく聞いて。仕事では四角タイプの人には柔らかく接するとトラブルが避けられます。

極論(前篇)

批評家 黒嵜想

2015年、「Sustainable Development Goals」、つまり「持続可能な開発目標」を意味する国際的な行動計画、通称「SDGs」が国連総会にて採択された。17の目標のもと、各項目には総数にして169の達成基準と232の指針が指定されている。社会インフラの整備に始まり、ジェンダー平等や環境保全活動など、そこには個人規模から地球規模の問題にいたるまで、あますところなく詳細なガイドラインが設定されている。21世紀初期に編まれた、この国際目標に冠されたスローガンは「誰一人取り残さない」。同年、習総書記とプーチン大統領は「帯一路」とユーラシア経済連合を連結させるとの声明を共同で発表した。批評家の福嶋亮大は『ハロー、ユーラシア』にて、2010年代以降の中国政府が提唱している「新たなシルクロード」、つまり経済圏拡張戦略「帯一路」構想の向こうに、「球」と「道」という二つの世界像の対立を見出している。中国語ではグローバル化を「全球化」と呼び、中央アジア〜ヨーロッパ〜アフリカの中継としてのユーラシア大陸を「帯」や「路」として捉えることは、世界を一つの「球(globe)」とすることと好対照を成している。グローバル化が顕著に進んだ21世紀とは、球体の世界像を基礎として、私たちにさまざまな恩恵とリスクをもたらした時代だ。球は丸い一つの面であり、全世界を否応なく相互に連結させる。気象・資本・交通といったネットワークは、緊密にあらゆる地域をほぼタイムラグなくつなげるが、コロナウイルスの感染拡大とその影響もまた、この連絡路を介してやってきた。世界が、内外の区別をもたない一つの球面である限り、私たちはこのようなリスクから逃れられず、内政と外政の区別も曖昧にならざるをえない。ならばグローバル化とは球状に解放された世界であるのみならず、「球状の監禁システム」とも言いえるだろう……。福嶋は以上のような問題提起とともに、いわば「別なるグローバリズム」として提出された世界像を現代の中国の、かつてのロシアや日本のイデオロギー思想に参照してゆく。

福嶋の言葉を筆者なりに言い換えよう。21世紀は、地球を陸海空のテクスチャに覆われた「真球」とすべきか、それとも境界線で縁取られた数々の平面がポリゴンをなす「多面体」すべきか、という2つの見立てが諸所で衝突している。気象予報と並べて報道される感染者数の推移を睨みながら、ソーシャルディスタンス、ロックダウン、ステイホームといった感染対策のオプションに翻弄されるとき。戦争において、大統領が個人メディアであるSNSによって世界中に共感と賛同を呼びかけ、あるいは情報や経済の国際的なネットワークを断ち切り自閉することで、自国民の戦意を高揚させるとき。私たちは連続性の極と断続性の極とのあいだで揺さぶられている。内外がなく、したがって中心を持たぬかのように見える「球」の全体性と、内外の区別と中心を打ち立てんとする「面」の個別性と。後者にとってみれば、SDGsのスローガンは「誰一人取り逃がさない」と同義なのかもしれない。

しかし、疑問は残る。真球と多面体の対立を無化する、地球の特徴が不問にされているのだ。この球体は静物ではなく、自転と公転を続ける動物だ。そして、自転する球体はひとつの球面でありながら、ふたつの頂点をもつ。球体を串刺しに貫く回転軸が球面とつくる接触点である。地球におけるこのふたつを私たちは「北極点」「南極点」と呼ぶ。極点を含むエリアである極域は、天体が回転する限り「ふたつの中心」であり続け、中心なき真球も中心ありきの多面体も、いずれの世界像も完成を阻まれるはずなのだ。時間の輪郭をつくる子午線はカーブを描きながら二点で束ねられており、北極海あるいは南極大陸を中心に描く世界地図は、各国の距離関係と領土主張の緊張をまったく別様に置き換えてしまうからだ。では、問いをこのように言い換えるべきだろう。21世紀のグローバル化へ至るまで、人類はこの特権的な頂点にして中心、ふたつの極をどのように丸め込んだのか? 導きの糸となるのは、19世紀末から20世紀を通して変遷をたどった南極大陸の扱いだ。

1893年。当時の日本国領土の最北端である占守島に、とある部隊が取り残された。厳しい雨風にさらされ、道中 19名もの死者を出してしまうも、最終目的地になんとか辿り着いた郡司成忠大尉率いる千島探検隊だったが、郡司はその後、隊に待機を命じ本土へ去ってしまう。島での越冬が決まった隊長は、さらなる地獄を見ることになる。皮膚が痛むほどの寒さ、壊血病により腕のなかで息たえる部下たち。食糧難のため、愛犬を撃ち殺してその肉を食らうこともあった。置き去りにされた隊が救出され本土に帰ることができたのは、日清戦争の開戦と終戦を挟んだ2年後、1895年。帰還した隊長は郡司を憎み、厳しく批判した。彼の名は白瀬矗(しらせのぶ)、当時32歳。のちに日本人初の南極到達を果たす人物である。

会期: 2022年10月5日(水)−10日(月)
会場: 秋田市文化創造館 A-3スタジオ
〒010-0875 秋田県秋田市千秋明徳町3−16

Dates: 2022.10.5(Wed)–10(Mon)
Venue:Akita City Cultural Creation Center Studio A-3
3-16, Senshu Meitoku-Machi, Akita City,
Akita Prefecture, 010-0875, Japan

#SUM_MER_2022 vol.1
発行: 2022年10月5日
編集: 長谷川新、西原珉
編集アシスタント: 山本夏綺
デザイン: 大槻智央

#SUM_MER_2022 vol.1
The issue date: 5.10.2022
Editors: Arata Hasegawa, Min Nishihara
Editorial Assistant: Natsuki Yamamoto
Designer: Chihiro Otsuki

助成: 令和4年度秋田市地域づくり交付金事業